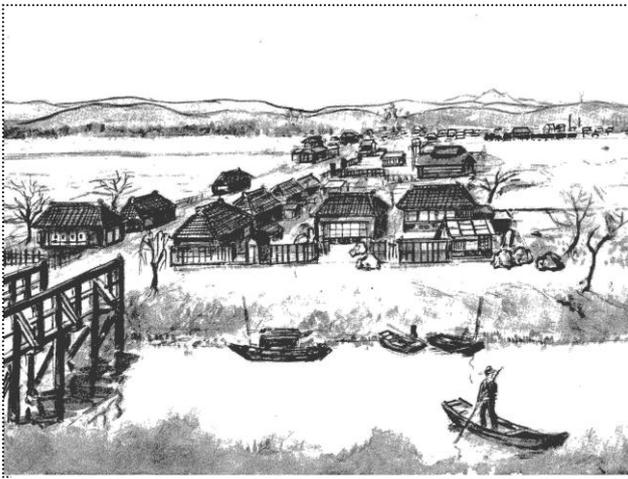


平成22年10月12日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会日本館活用委員会

← ナガトロ (長道路)

今年7月、本校の校歌が縁で交流がある静岡県・磐田南高の同窓会長さんらが来校されました。その折、本校の概略を紹介するパンフレットの出身中学校別生徒数を見て、その中学校数の多さに驚いておられた。5名以上在籍している中学校だけでも50校に及び、全在校生の出身中学校を総計すると110校を超えている。確かに本校の通学範囲はかなり広い。それだけに遠距離通学に苦勞されている生徒さんも多いかと思ひます。



中27回 佐賀 進氏 「スケッチで綴るふるさと土浦」より

## 明治期の通学

『進修百年』の第二編第一章に「真鍋台の青春」として、卒業生たちの土中(一高)時代の思い出が収録されている。そこには、恩師との出会いや級友との交流、遠足や運動会など多様な記憶が記されている。その中で比較的多く語られているのが通学に関するものだ。特に土中時代(戦前)にそれが多い。

「私が水戸中学土浦分校へ入学したのは、明治三十二年四月、即ち十九世紀最後の年である。その頃中学といえは茨城県には、水戸中学と三年生までの分校が土浦と下妻にあっただけであった。」と述べているのは風見章氏(中3回、元近衛内閣 司法大臣)で、水海道の自宅からは通うことが出来ず、一ヶ月三円の宿屋に下宿している。翌年、水海道と下妻の間に乗合馬車が行くことになり、「まだ自転車のなかった時代だから、あるく外は、人力車だけが旅行者の利用し得る唯一の交通機関であった。…乗合馬車が出来たので、往復も大変便利になったと云うもので、その年私は下妻中学へ転校することになった。」と分校当時の交通事情と中学への通学の大変さを述懐している。

## 真鍋台へのナガトロ

大正二年に入学した中西秀男氏(中17回・元早大教授)は「県内に中学校がいくつあったか、正確には知らないが、まず五校か六校ぐらいだろう。だから自宅の遠い生徒もかなりあった。その上、交通機関は常磐線の汽車と土浦・北条間の乗合馬車、それに霞ヶ浦を麻生あたりまで通う蒸気船があるだけで、バスなどはもちろんないから、自宅が遠すぎる者は学校の構内にある寄宿舎に入った。親戚知人のところへ住み込んだりした。

## 文字どおりの登校—真鍋坂

自転車通学もかなり多かったが、石岡町からだと片道一時間かかった。…汽車その他の交通機関を使って通学することはなかったと思う。便利に使えるほど何本も出ていなかった。」と当時の土中生の通学状況を述べているが、当の中西氏は市内の自宅から徒歩で通学している。氏は別稿で「大正七年三月に卒業するまで本町から真鍋台まで通学した。中町・田町・横町と通り抜けて北門へ出ると、そこで家並みがバツタリ途切れて、三百メートルばかり向こうの真鍋まで、右も左も広い田んぼだった。はるか右手には常磐線の線路が見えるし、左手には遠く小田山が見え、筑波山が見える。その田んぼの中の一本道をナガトロまたはナガト一口といった。長道路の訛りかも知れない。…ここを経て真鍋台の森から頭を出している母校の尖塔を見ながら…」登校している。このナガトロに関して佐賀進氏(中27回・元佐賀医院院長)も「当時の住まいは内西町、土浦小学校の側でした。学校へは今の裁判所近くの搦手橋を渡り、現在の関東銀行の脇を抜けて横町へ出て、新川を渡ります。そこから先が長道路(長免路)で真鍋の宿まで井原石屋・桜井鉛屋・石塚写真店くらいしか家がなく、筑波山がよく見えました。そのため風がよく通り、冬はとても寒く、西風の吹く日などは耳が痛くちぎれそうでした。」と書いています。

今でも古い店蔵などが残る真鍋は土浦とは完全に独立した町並を形成しており、結構繁盛していた。先の佐賀氏は「遠くから来る者には自転車通学が許可されていませんでしたが、自転車の校内乗り入れは禁止されてきました。それで、この真鍋の坂付近のお店で自転車を預かってくれました。坂の近くに



真鍋坂下(中27回 佐賀 進氏 画)  
この界隈に下宿屋も多くあった

は下宿屋もありました。中学生だけではなく、土浦高女の女学生も下宿していました。…筑波線の真鍋駅に近づくと筑波線で通学してくる大勢の女学生がやってきます。」と続けて書いています。「真鍋へ入って長道路(ながとろ)を筑波線の踏切に向かう。踏切を渡って真鍋の街並みを過ぎるといよいよ心臓破りの坂にさしかかる。この坂の上り口が、営業を始めたばかりの市内バスの終点で、五銭あればこのバスで駅(土浦)まで行けるのである。とにかくこの坂はきつかった。あまり丈夫でなかった私にとっては、校門にたどりつく前の難関であった。文字通りの登校であった。」と述べているのは、やはり市内の土浦駅近くから徒歩通学をしていた小林元光氏(中30回)である。

## 楽ではなかった汽車通学

大正から昭和にかけて交通状況もかなり良くなり、常磐線や筑波線を利用した

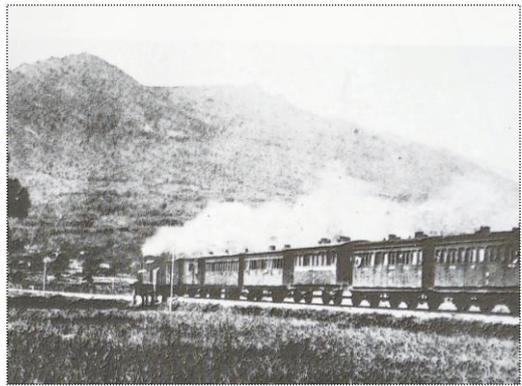
通学も一般的になってきた。当時の汽車通学の様子を殿塚増雄氏（中25回）は次のように伝えている。「常磐線での汽車通学が可能になったのは、大正の末期だったと思う。それまでは通学に便利な時刻表ではなかったし、また一日上り下り各、わずか六、七本だった。だから、寄宿舎に入るか、土浦、真鍋に下宿生活を余儀なくされた。しかし、大正末期に通学可能となったとはいえず、とにかく本数が倍増して、登下校に至極好都合となったわけではない。登校後、始業までなお三、四〇分待たねばならなかったり、放課後も折り返し汽車などなく、二時間近くも待たねばならぬ不便もあったことを覚えている。そのうえ土浦駅から真鍋の坂を上がって学校まで、街の中をテクテク歩いて約三〇分もかかった。」

明治28年に土浦一友部間が、29年に土浦一田端間が開通した常磐線（当初は海岸線と称した）市川 彰氏（元本校教諭）著書より



また、筑波線を利用して通学した大津国三氏（中30回）は「昭和初期の筑波線は…また運転回数が極めて少なく、都合のよい列車がなくて、学校に着いてから授業が始まるまで一時間以上もあった。下校になると、汽車に間に合わせるため、大急ぎであの真鍋坂をかけおろるのが常であった。何しろ乗り

はくると二時間も待たねばならないので…」というように汽車通学も決して楽なものではなかった。



筑波山麓を走る筑波鉄道の列車 ↑  
大正7年に土浦一岩瀬間が開通した市川 彰氏（元本校教諭）著書より

### 泥だらけの青春

昭和の初め頃になると、自転車通学者が多くなってきた。学校まで10km前後を徒歩で通う生徒はかなりの筈だ。こうした遠距離徒歩通学者にとって、自転車という交通手段の登場は画期的なものであったに違いない。しかし、その実態は必ずしも快適なものではなかったようである。最後に「真鍋台の青春」に寄せられた前島福松氏（中30回）の「泥んこの自転車通学」を紹介したい。その一部分を引用しようとしたが、止めた。小気味のいいフレーズが連なる文章をコマ切れなどに出来ない。初めの部分だけ省いてほぼ全文を掲げることにした。

「当時私の自宅は、今の千代田村（現かずみがうら市）雪入の山麓にあり、学校まで約十二kmあって、通学も容易でなかったが、私の兄は五年間を徒歩で通学し通じたのだから

大したものである。私など初めから自転車通学だったのだから、兄の時代に比較すれば随分楽だったわけであるが、それでも容易ではなかった。というのは当時の道路状況が非常に悪く、今とは比較にならない悪路であった。自宅から学校までの距離のうち、三分の二に当たる八kmは砂利も敷かれていない道路であった。一雨降ればたちまち泥んこのぬかるみと化し、自転車など受け付けないような、後に述べる霜解け道と大差のない有様になってしまつた。

それでも四月から十月までの間はまだよかった。雨の降らない限り、普通に走れたからであるが、十一月から三月まで、特に十二月、一月、二月の三ヶ月はひどかった。朝霜が降りるか、薄氷がはる。太陽が昇ってくるにつれ、霜がとけ始める。そうなるが大変だ。道路は徐々に泥土化してくる。その泥土が車輪につき始める。五十mも走らないうちに、つきだした泥土が、タイヤと泥よけとの間に詰まって、自転車は動かなくなる。このことは経験した者でないとわからないだろうが、自転車から降りて、車輪のタイヤと泥よけとの間に詰まった泥土を取り除きにかかる。この作業がまたなかなかの難作業である。篠や竹へらでけずり落とすのだが、とても一回ではだめだ。何回か同じことを繰り返しているうちに、車輪の泥土がスポンに着いてくる。スポンだけのうちはまだよい。随分注意している心算でもいつの間にか上着のあちこちにも泥がつく。繰り返しているうちに、上から下まで泥まみれになってしまつことも年に何回かはあった。

さて掃除し終わったところで、また同じことを繰り返すのは嫌だから、エイ面倒とはかり、自転車を肩にかついで歩きます。何のこ

とはない。人が自転車に乗るのではなく、自転車が人に乗っている奇妙な姿である。下の人は泥まみれで半ペソをかき、寒いのに汗をたらたら流している。

自転車をかついで歩けるのはせいせい五十m位で、肩は痛くなり、足はぶらぶらついてくる。一休みしてまたかついで歩きます。五十m位でまた一休み。こんなことを繰り返しても、やっと三百m位が限界で、つい自転車に乗ってしまつ。するとまた同じことになる。時間はどんどん経ってゆくし、疲労でふらふらになる。だが、家を出たからにはどうしても学校に行かねばならぬ。

そうこうしているうちに国道に出る。今のように舗装はされてなかったが、砂利道であり、泥土に悩まされることはない。国道に出るともう授業開始まで間がないので、夢中でペダルをふんで、汗だくになって、やっと学校の門に達する。丁度その時、朝礼を知らせる鐘がきこえてくる。自転車置き場に自転車を置いて、駆け足で教室に入る。先生が出欠をとっている。慌てて自分の席につく。泥まみれの姿のまま。

こうして私の五年間は過ぎていったのである。

激しい泥土との格闘の果て、たどろついた教室で息を整え、授業に立ち向かっていったひたむきさが伝わってくる。通学という手段でしかない行為であっても、かかる困難さを五年間貫き通したこと自体大いなる意味と価値を有するものである。改めて敬意を表したい。

今号では、『進修百年』の第二編「真鍋台の青春」から土中時代の通学の様子を、先輩たちの「思い出の記」の引用文で紹介した。詳しくは『進修百年』を一読されたい。